

一九二、三〇年代南アフリカのカラード

堀 内 隆 行

【要約】 カラードは今日の南アフリカにおいて、他国のように有色人種の総称ではなく、ケープタウン周辺の先住民、解放奴隷、混血の人々を意味する。本稿では、この人々にとつての一九二、三〇年代の意味を探る。二〇世紀最初の二〇年、レイシズムの高まりはカラードを白人とアフリカ人の中間においたが、一方ではカラードの白人化も進行した。こうした事態に直面して、カラードのエリート層はとくに三〇年代、自己の歴史を語るることによつてアイデンティティの明確化を図る。しかし、オランダ系／ボア人のアフリカーナ・ナシヨナリスト政権による経済的、政治的圧迫が高まるなかで、白人との共通性の主張も一層重要になってきた。そこで、カラード・ヨーロッパ人協議会などに参加したイギリス系のリベラル派の歴史家が一定の役割を担う。リベラル派は、カラードの「文明性」に白人との共通項、アフリカ人になりたいする優越の根拠を求め、広く影響を与えていった。

史林 九四巻一号 二〇二一年一月

はじめに

民族、ないし人種概念は、近代ヨーロッパの植民地支配について考えていくうえで不可欠な要素である。ヨーロッパ人はこうした概念を用いて、非ヨーロッパ人にたいする社会的優位を保とうとした。そこでは、民族、人種の違いが階級の違い、市民的権利の有無を意味し、たとえば女性も「白人」か「非白人」かなどによつて境遇が大きく異なることとな



図1 南部アフリカ (1930年)

った。つまり、植民地支配においてはしばしば、民族、人種が階級、シテイズンシップと同義で、ジェンダーより優先した。一九四八年にはじまった南アフリカのアパルトヘイトも、基本的には同じ構造をもつ。この時期、南アフリカはすでにイギリス帝国の自治領であり、狭義の植民地ではなかった。しかし、同年に政権を獲得したアフリカーナ（オランダ系／ボーア人）・ナシヨナリストの国民党は、アフリカーナが都市に大量流入する事態に直面して、人種隔離の徹底を図った。アパルトヘイトの重要な本質は、少数派のヨーロッパ系がいかに多数派の非ヨーロッパ系を分割して管理、支配するか、ということにある。国民党政権は、アフリカーナとイギリス系を「白人」として統合する一方、「非白人」を「バントウ」（アフリカーナ）、「アジア系」（インド系）などの民族に区別した。また、バントウについては「ズールー」、「コーサ」などの部族に分類し、七〇年代なかばになるといくつかの部族の「ホームランド」（「バントウースタン」）に名ばかりの独立を与えた。バントウの結束を防ぐとともに、南アフリカでは他のアフリカ諸国のように脱植民地化が進展していない、との国内外の批判に対応しようとしたのである。

表1 南アフリカの登録集団別人口

	1911年	1951年	1970年	1980年	1996年
アフリカ人	4,019,006	8,560,003	15,057,952	18,965,327	33,739,523
白人	1,276,242	2,641,689	3,752,528	4,453,273	5,322,003
カラード	525,943	1,103,016	2,018,453	2,554,039	3,726,232
アジア系	152,203	366,664	620,436	794,639	1,032,680
計	5,973,394	12,671,452	21,448,169	23,771,970	43,820,444

R. Davenport and C. Saunders, *South Africa: A Modern History* (Basingstoke, 2000), p. 428.

このように非ヨーロッパ系を民族、部族などに分割することは、アパルトヘイトの時期ばかりでなく南アフリカ史のどの時代においてもメイン・テーマの一つとなってきた。こうした問題を検討していくうえで焦点となるのがカラードのカテゴリである。カラードは今日の南アフリカにおいて、他国のように有色人種の総称ではなく、ケープタウン周辺の先住民、解放奴隷、混血の人々を意味する。一九世紀末以降、レイシズムの高まりはこうした人々を一つの民族にし、白人とアフリカ人の中間においた。表一は二〇世紀の登録集団別人口を示すが、当時、誰をどの民族に分類するかの基準は大きく変化した。本稿では、この変化の時期に注目していきたい。

民族の研究が南アフリカ史において本格化したのは、アパルトヘイトが終焉に向かいつつあった一九八〇年代末以降である。本格化の背景としては、B・アンダーソン『想像の共同体』、E・ホブズボウム/T・レンジャー編『創られた伝統』（ともに一九八三年）などナショナリズム論の流行も存在した。とくに、レンジャーが南アフリカの隣国ジンバブエをフィールドにしていたことは大きかった^①。しかし、南アフリカ史の民族研究は、アパルトヘイトが生み出した部族の虚構性を告発するという明瞭な目的ももっていた。この分野の主要な成果は、L・ヴェイル編『南部アフリカにおける部族主義の創出』（一九八九年^②）である。同書は周辺諸国（レンジャーなど）、アパルトヘイトを生み出したアフリカーナ・ナショナリズム（H・ギリオミーなど）の論文のほか、ズールー、ホームランド／バントゥースタンの一つシスカイなどにかんするものを所収している。^③

カラードの研究も、こうした民族研究と時を同じくして本格化した。『部族主義の創

『出』には、I・ゴールドインもカラードにかんする論文を寄稿している。ゴールドインは同論文と一九八七年の著書において、国民党政権による労働優遇政策が白人とアフリカ人の中間的存在としてのカラードを創出した、と論じた^④。また、R・H・デュ・プレもより概括的に、アパルトヘイト下のカラード創出を批判している。ゴールドイン、デュ・プレなどに共通するのは、S・B・ピコ（一九四六―七七年）の黒人意識思想の影響であった。つまり、白人によるカラードとアフリカ人の分割を排し、非白人全体の連帯を志向したのである^⑤。

しかし一九九四年、アパルトヘイトの終焉とともに政権を獲得したのは、「和解」／多文化主義を標榜しつつも現実にはアフリカン・ナショナリストのANC（アフリカ民族会議）であった。ポスト・アパルトヘイト期の南アフリカにおいては、ANCの多数派支配にたいするカラードのマイノリティ・ナショナリズムが顕著になっている。こうした現状は、一九三―四〇年のカラード教員連盟などにかんするM・アドヒカリの研究に反映している。アドヒカリは、一九世紀末のレイシズムの高まりがカラードを一つの民族にしたことを認めるものの、二〇世紀をとおして白人ではなくカラードじしんの役割が重要であり、アイデンティティは変化しなかった、とする^⑦。

このように先行研究は、カラードの形成が一九四八―九四年のアパルトヘイト下か一九世紀末か、重要なのは白人の役割かカラードじしんの役割か、などを議論の焦点としてきた。こうした議論にたいして、本稿では中間の時期、とくに一九二、三〇年代を変化の時代と捉えていきたい。当時、国民党がはじめて政権を獲得すると、イギリス系のリベラリズムがアフリカーナ・ナショナリズムと対抗し、双方がカラードの問題に関心を示した。しかし、国民党／アフリカーナ・ナショナリズムとカラードとのかかわりについてはギリオミーの一九九五年の論文があるものの、イギリス系のリベラリズムとカラードとのかかわりについては、ギリオミーと比肩しうる研究が存在しない^⑧。そもそも、アフリカーナ・ナショナリズムと対抗するリベラリズムの問題じたいが、いままでほとんど研究の対象となつてこなかった^⑨。たしかに、近年はANC支配にたいするイギリス系の反発をふまえて、ブリティッシュ・アイデンティティについても南アフリカ史研究者の

関心が高まりつつある。しかし、英語文化がアフリカンス語文化を圧倒している現状を反映して、一九二〇世紀転換期のアフリカーナの親英的性格、イギリス系との協力などを重視する立場が主流となっている。^⑧

カラードのアイデンティティについては多様な分析がありうるが、本稿ではとくに、歴史の語りとの関係に注目したい。一九二、三〇年代、カラードの問題にたいするリベラル派の関心は歴史についての関心であることが多く、またこの時代は、カラードが自己の歴史を本格的に語りはじめた時代でもあった。しかし、アフリカーナ・ナシヨナリストによる歴史の利用などのテーマと比較して、カラードの記憶が研究の対象になったのは最近のことであり、その場合にも、カラードでない人々とのかわりまで含めて論じた研究は少ない。^⑨以上の諸点をふまえて二、三〇年代、とくに三〇年代のカラード・アイデンティティと歴史の語りとの関係を、リベラル派の役割にも留意しつつ検討していくことが課題となる。筆者はいままで、E・A・ウォーカー（一八八六—一九七六年）、W・M・マクミラン（一八八五—一九七四年）などリベラル派の歴史家にかんして研究を進めてきた。^⑩本稿は、こうした研究を敷衍することにもなろう。

- ① B. Anderson, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism* (London, 1983) (白石隆・白石みよ子訳「想像の共同体——ナシヨナリズムの起源と流行——」リブローポーター 一九八七年)。E. Hobsbawm, and T. Ranger (eds), *The Invention of Tradition* (Cambridge, 1983) (前川啓治・梶原景昭ほか訳「創られた伝統」紀伊國屋書店 一九九二年)。
- ② L. Vail, (ed.), *The Creation of Tribalism in Southern Africa* (London, 1989)。
- ③ T. Ranger, 'Missionaries, Migrants and the Manyikas: The Invention of Ethnicity in Zimbabwe'; H. Gilmore, 'The Beginnings of Afrikaner Ethnic Consciousness, 1850-1915'; S. Marks, 'Patriotism, Patriarchy and Purity: Natal and the Politics of Zulu Ethnic Consciousness'; Anonymous (J. B. Peires), 'Ethnicity and Pseudo-Ethnicity in the Ciskei'; シスカイ論文については、拙稿「アバルトクイアとウォーラステイン」川北稔編「ウォーラステイン」(講談社、二〇〇一年)、一五一—一五四頁。
- ④ I. Goldin, 'Coloured Identity and Coloured Politics in the Western Cape Region of South Africa'; id., *Making Race: The Politics and Economics of Coloured Identity in South Africa* (London, 1987)。
- ⑤ R. H. Du Preez, *Separate but Unequal: The 'Coloured' People of South Africa—A Political History* (Johannesburg, 1994)。
- ⑥ S. B. Biko, *I Write What I Like* (London, 1979) (斎藤一ほか訳『

は書きたらことを書く——黒人意識運動の思想——」現代企画室（一九八八年）。

- ⑦ M. Adhikari, *Not White Enough, Not Black Enough: Racial Identity in the South African Coloured Community* (Athens, Ohio, 2005), pp. vii-viii. 以下を参照。Id., "Let Us Live for Our Children": *The Teachers' League of South Africa, 1913-1940* (Cape Town, 1993).

- ⑧ H. Gilhorne, "The Non-Racial Franchise and Afrikaner and Coloured Identities, 1910-1994," *African Affairs* 94-375 (1995). 以下を参照。G. Lewis, *Between the Wye and the Wall: A History of South African 'Coloured' Politics* (Cape Town, 1987), pp. 119-173.

- ⑨ リベラリズムとアフリカ人々のかわりごとくは、P. B. Rich, *White Power and the Liberal Conscience: Racial Segregation and South African Liberalism 1921-60* (Johannesburg, 1984).

- ⑩ たムネチ、M. Tamarkin, *Cecil Rhodes and the Cape Afrikaners*:

第一章 カラードの形成——一九二〇年代まで——

本稿の課題は、カラード・アイデンティティにとって一九二、三〇年代とは何だったのかを探ることである。本章ではその前提として、先行する二〇世紀最初の二〇年の意味を検討していく。しかし、議論の出発点は一七世紀なかばより一七世紀はじめまでのオランダ領ケープ植民地の時期におく必要がある。

オランダ東インド会社が今日のケープタウンに、船舶に食糧を供給する基地を建設したのは一六五二年のことである。一七世紀末になると入植が本格的にはじまり、ヨーロッパ系は以降、徐々に内陸部に進出していった。入植者が最初に出会った先住民は、バントゥー語を話すアフリカ人ではなく（両者の遭遇は一七七〇年代以降）つぎの二つの集団であった。

The Imperial Colossus and the Colonial Parish Pump (London, 1996).
ブリタニック・マニフェンティズムの研究動向については、拙稿「歴史家E・A・ウォーカーと南アフリカのブリタニック・リベラリズム」『史料』九二巻六号（二〇〇八年）七二—七十三頁。

- ⑪ たムネチ、K. Ward and N. Worden, "Commemorating, Suppressing and Invoking Cape Slavery" in S. Nuttall and C. Coetzee (eds), *Negotiating the Past: The Making of Memory in South Africa* (Oxford, 1998); Adhikari, *Not White Enough, Not Black Enough*, pp. 33-65. アフリカーナ・ナショナリストによる歴史の利用については、L. Thompson, *The Political Mythology of Apartheid* (New Haven, 1985); L. Witz, *Apartheid's Festival: Contesting South Africa's National Past* (Bloomington, Indiana, 2003).

- ⑫ 拙稿「ウォーカー」。同「歴史家W・M・ベクマンの南アフリカ時代（一八九一—一九三三年）」『歴史研究』（大阪教育大学歴史学研究会）四六号（二〇〇九年）。

第一の集団は狩猟採集民のサンで、ヨーロッパ人はブッシュマンと蔑んだ。他方、第二の集団は牧畜民のコイコイ（コエコエ）で、蔑称はホットントットである。こうした先住民の人口は、植民地の拡大とともに激減していった。当時のケープ社会にはほかにも、アフリカ、南アジア、東南アジアなどに起源をもつ奴隷が存在した。また、入植者、先住民、奴隷三者のあいだでは混血も進んだ。更に、先住民、奴隷、混血の人々の一部は内陸部に逃散し、長い時間を経てグリカ、バスター（バスタード）などの集団を形成していった。^①

一八一四年、植民地がイギリス領となったことは、非ヨーロッパ系（混血を含む）の境遇に一定の影響を与える。二八年、当局は法令第五〇号を発して先住民の法的不平等を改善、三四年には奴隷制の廃止をケープにも適用した。五四年には、植民地議会在が非ヨーロッパ系にも、財産、所得制限を付したものの選挙権を認めている（被選挙権も認めたが非ヨーロッパ系議員は実現しなかった）。^② このケープ・リベラリズムは少数派のイギリス系が、多数派のオランダ系と対抗するうえで協力者を必要としたことによるものである。^③ 一方で六〇年代まで、非ヨーロッパ系が社会的に上昇することは少なかった。^④ こうした人々のアイデンティティについて、先行研究は言語、宗教などより歴史を核としたものであったと指摘している。コミュニティの言語（話しことば）は、英語の地位も高まっていたものの、基本的にケープ・オランダ語であった。しかし、両者は各々イギリス系、オランダ系のことばでもあったので、言語が非ヨーロッパ系と区別する指標とはなりえなかった。また、コミュニティの宗教は一層多様であった。オランダ改革派教会、国教会などキリスト教徒のほか、解放奴隷のなかにはムスリム（マレー系）も存在した。こうした状況にあつて、人々をつないだのが奴隷時代の記憶である。ケープタウンでは毎年、奴隷制廃止記念日の一二月一日に、非ヨーロッパ系がパレード、ピクニックなどに興じ、かつての主人を風刺する「ドラム・ソング」を唱和した。更に、もと奴隷のなかには同日、祈禱の場で、苦難の体験を語り聞かせる者もいたという。^⑤

ケープの植民地社会は一九世紀末、急速に変化する。相次ぐ鉱産資源の発見を契機とする産業化、イギリス帝国の南部

アフリカ支配の拡大はまず、オランダ系の疎外感を高めた。一八七〇年代、改革派教会の牧師などはケープタウン近郊のバールを拠点として、話しことばのケープ・オランダ語をもとに書きことばのアフリカーンス語を確立していく。この動きは二〇世紀のアフリカーナ・ナシヨナリズムの起源となり、一八八〇年には南部アフリカ初の政党であるアフリカーナ同盟も成立した。^⑥しかし、同盟の主張はアフリカーナ農場主の保護などにとどまり反英的ではなく、八、九〇年代にはイギリス系との協力も進展する。とくに九〇―九六年、植民地首相を務めたC・J・ローズ（一八五三―一九〇二年）は、歴史の共有など入植者の文化統合を図った。^⑦

ここで重要なのは、ヨーロッパ系のあいだの協力、ないし文化統合が非ヨーロッパ系にたいするレイシズムと一体であったことである。植民地の拡大によってバントゥー語を話すアフリカーナ、ことにコーサ人が大量流入すると、植民地議会は一八八七、九二年の二度、非ヨーロッパ系選挙権の財産制限を強化した。また、九九―一九〇二年の第二次南アフリカ（アングロ・ボーア）戦争の結果ボーア人のトランスヴァール共和国、オレンジ自由国がイギリス領となつても、非ヨーロッパ系選挙権は両地域に拡大しなかった。更に、一〇年の南アフリカ連邦結成によって植民地議会は連邦議会に発展的に解消するが、非ヨーロッパ系は被選挙権を喪失した（選挙権は保持）。こうした事態にたいして、ケープタウン周辺の解放奴隷、混血の人々、なかでも熟練労働者、小売商、事務員、聖職者、教員などのエリート層は危機感を深め、〇二年、APO（アフリカ政治機構）を結成する。〇五年には開業医のA・アブドゥラーマン（一八七二―一九〇四年）が議長に就任し（没年まで）、政治的権利擁護の請願活動を本格化した。〇九年には隔週刊の『APO』紙を創刊、一〇年には二〇、〇〇〇人の成員を達成し、APOは二〇世紀前半期までのケープにおいて最大の非ヨーロッパ系政治組織となる。^⑧

しかし、APOは必ずしも非ヨーロッパ系全体の連帯を志向しなかった。APOの基本的な主張の一つはケープタウン周辺の解放奴隷、混血の人々などを、植民地に大量流入したアフリカーナと区別することであった。この時期、当局も両者を区別しようとしている。たとえば、一八七五年のケープ植民地の人口調査は「白人」（二二、三六、〇〇〇人）、「カラード」

(四八四、〇〇〇人)の二分類で、カラードは「マレー系」(ムスリム)、「混血その他」、「カフィール」(コーサ人)などを含んでいた。^⑨ところが、一九〇四年の同調査は白人(五八〇、〇〇〇人)、カラード(三九五、〇〇〇人)、「原住民」(一、四二五、〇〇〇人)の三分類である。マレー系、混血その他などはカラードにとどまる一方、カフィールなどは原住民となった。^⑩ APOは、カラードが原住民と違って白人に近く文明的であることを強調した。たとえば、〇九年五月二四日の『APO』紙創刊号はつぎのように主張する。

……だれもが、南アフリカには原住民でない多くのカラードがいることをよく知っている。……かれらは——もつとも不愉快な私たちで、という人もいるが——文明の所産である。かれらはさまざまな程度の混血の所産でもある。その肌の色はカフィールの黒から、ニグロのいかなる痕跡もほとんど見出せない淡い色までさまざまである。その多数派の特徴は完全にコーカシアンであり、生活様式も最良のヨーロッパのモデルに従っている。……^⑪

ゆえに、カラードは原住民より政治的権利に値する、とAPOは主張した。^⑫ アフリカ人の一部は一九一二年、カラードのAPOとは別組織のSANNAC(南アフリカ原住民民族会議)を結成することとなる(二三年ANNCと改称)^⑬。

APOはまた、親英的でもあった。ケープ植民地では伝統的に非ヨーロッパ系が、オランダ系と対抗するイギリス系に協力することによって諸権利を獲得してきた。APOも一九〇〇年代には反アフリカーナのイギリス系政党である進歩党を、一〇年の連邦結成以降は同党が発展的に解消したユニオニスト党を支持する。APOは、「文明的な」英語と「野蛮な」ケープ・オランダ語を対比し、前者の使用を奨励もした。たとえば、一〇年八月三日の『APO』紙は以下のように訴える。

……〔カラードは〕英語——もつとも高貴な自由と解放の思想をもたらすことばであり、世界で最良の文学作品を有し、あらゆる言語のうちでもつとも普遍的に有用なことば——に習熟すべきである。あまりにもしばしば聞かれる、野蛮なケープ・オランダ語で表現する習慣はできるかぎり捨てよう。……^⑭

『A P O』紙じたい基本的な使用言語は英語で、社説など重要な記事についてのみオランダ語欄を設けているにすぎなかった。A P Oの親英的性情は、第一次世界大戦において顕著となる。一九一四年、旧オレンジ自由国などのアフリカーナが、ドイツ領南西アフリカ(現ナミビア)に侵入するという政府の決定に抗議して蜂起すると、A P Oは蜂起を非難した。¹⁵⁾ また、一五年にはケープ歩兵軍団を組織し、東アフリカ、フランスなどに派遣している。¹⁶⁾ ところが、大戦の結果南西アフリカが連邦の委任統治領となっても、非ヨーロッパ系選挙権は当地に拡大しなかった。この政治的失敗にたいして、A P Oは一九年、アフリカ政治機構よりアフリカ人民機構に改称、貧困、教育などの活動領域に転換を図るものの運動の退潮は否めず、二三年には『A P O』紙の刊行を停止した。¹⁷⁾

はじめに記したように、アドヒカリの研究は、カラード・アイデンティティが一九世紀末の形成以降変化しなかった、としている。しかし二〇世紀最初の二〇年、カテゴリーは不明確かつ流動的であった。A P Oは基本的にカラードの組織であるが、少数のヨーロッパ系、アフリカ人の成員もあり、名称にもカラードの語はなかった。¹⁸⁾ 当局による白人、カラード、原住民の三分類もあいまいであった。「ブッシュユマン」、「ホットtentott」、オランダ領時代に内陸部に逃散した「グ리카」、「バスタード」などは、カラードにとどまることが多かったものの(一九〇四、一一年の人口調査など)、原住民となることもあった(一六年の原住民定義修正法など)。¹⁹⁾ 当局はまた、カラードを白人と区別することの困難も認識していた(二一年のケープ最高裁判所の判断など)。²⁰⁾ 一方でカラードじしんも、社会的に上昇して白人に同化することを望み、奴隷時代の記憶などを核とした伝統的なアイデンティティは急速に解体しつつあった。たとえば、一九〇九年二月四日の『A P O』紙は以下のように記す。

……わたしは、人々が二月一日についてあまりにもほとんど考えないことを残念に思う。その日、だれもが知っているように、奴隷たちは解放された。わたしたちが、国王の誕生日やボクシング・デーのようにその日を記念しないのはなぜか。……以前、ケープの褐色の人々はそれをたしかに記憶していた。しかし、いまではかれらのあまりにも多くが白人になりたがっている。かれらは、金

を持つと「白人を演じる」。……^㉔

こうした事態に直面して、カラードのエリート層はとくに一九三〇年代、自己の歴史を語ることによってアイデンティティの明確化を図っていた。そこでは、イギリス系のリベラル派も一定の役割を演じるようになった。

- ㉑ ハレンダ語による種民衆の語彙は、N. Worden, *Slavery in Dutch South Africa* (Cambridge, 1985); R. Elphick and H. Giliomee (eds.), *The Shaping of South African Society, 1652-1840* (Cape Town, 1989). 各書「ケルン、ロイニヤやヤムボロニヤケルン(コトケルン)」は、*ケルニヤの地誌*、ケルンの条を参照せよ。『日蘭通譯』の註巻がロイニヤのことと誤解されてしまっている。M. Besten, "We Are the Original Inhabitants of This Land": Khoesan Identity in Post-Apartheid South Africa, in M. Adhikari (ed.), *Burdened by Race: Coloured Identities in Southern Africa* (Cape Town, 2009), p. 135.
- ㉒ J. L. McCracken, *The Cape Parliament* (Oxford, 1967).
- ㉓ S. Trapido, "The Friends of the Natives": Merchants, Peasants and the Political and Ideological Structure of Liberalism in the Cape, 1854-1910, in S. Marks and A. Atmore (eds.), *Economy and Society in Pre-Industrial South Africa* (London, 1980).
- ㉔ N. Worden, 'Adjusting to Emancipation: Freed Slaves and Farmers in the Mid-Nineteenth-Century South-Western Cape', in W. G. James and M. Simons (eds.), *The Angry Divide: Social and Economic History of the Western Cape* (Cape Town, 1989).
- ㉕ V. Bickford-Smith, *Ethnic Pride and Racial Prejudice in Victorian Cape Town: Group Identity and Social Practice, 1875-1902* (Cambridge, 1995), p. 23; Ward and Worden, 'Commemorating, Suppressing, and Invoking Cape Slavery', pp. 203-204.
- ㉖ 永原静子「南アフリカの「ボエリカーナ」(ブール人)」『日蘭通譯』一〇〇編八巻(二〇〇一年)。
- ㉗ T. Horuchi, 'British Identity in the Late Nineteenth Century Cape Colony: Racism, Imperialism, and the Eastern Cape', *Zinbun Institute for Research in Humanities, Kyoto University* 41 (2009), 4-10. 〓 J. P. Lewis, *Between the Wire and the Wall*, pp. 20-28.
- ㉘ Bickford-Smith, *Ethnic Pride and Racial Prejudice*, pp. 10, 31.
- ㉙ L. M. Thompson, *The Unification of South Africa 1902-1910* (Oxford, 1960), pp. 486-487.
- ㉚ APO, 24 May, 1909.
- ㉛ ケルニヤ語『Ibid.』, 9 April, 1910.
- ㉜ S. Dubow, *The African National Congress* (Stroud, 2000), p. 1.
- ㉝ APO, 13 August 1910. 『日蘭通譯』『Ibid.』, 8 April, 1911, 10 August, 1912.
- ㉞ *Ibid.*, 19 September, 1914; 3 October, 1914; 31 October, 1914; 28 November, 1914; 12 December, 1914; 2 October, 1915; 24, October, 1919; 6 December, 1919. 『日蘭通譯』ケルニヤの条を参照せよ。
- ㉟ N. G. Garson, 'The Boer Rebellion of 1914', *History Today* 12 (1962); T. R. H. Davenport, 'The South African Rebellion, 1914', *English Historical Review* 78-306 (1963); S. Swart, "A Boer and His Gun and His Wife Are Three Things Always Together": Republican

Masculinity and the 1914 Rebellion'. *Journal of Southern African Studies* 24-4 (1998).

⑨ *APQ*, 17 April, 1915; 15 May, 1915; 2 October, 1915; 30 October, 1915; 13 November, 1915. 式に参考。 *Ibid.*, 22 August, 1914; 5

September, 1914; 28 November, 1914; A. J. B. Desmore. *With the*

2nd Cape Corps thro' Central Africa (Cape Town, 1920); I. D.

Difford. *The Story of the 1st Battalion Cape Corps, 1915-1919*;

With an Introduction by John X. Merriman (Cape Town, 1920); B.

Nason. 'Why They Fought: Black Cape Colonists and Imperial

Wars, 1899-1918'. *International Journal of African Historical Studies*

37-1 (2004).

⑩ Adhikari, *Not White Enough, Not Black Enough*, pp. 66-79. 戦後史

史記に参考。 *APQ*, 1 August, 1919; 15 August, 1919; 29 August,

1919; 12 September, 1919; 24 October, 1919; 7 November, 1919.

⑪ *Ibid.*, 4 November, 1911.

⑫ Besta. 'We Are the Original Inhabitants of This Land', pp.

136-137.

⑬ Gilmore. 'Non-Racial Franchise and Afrikaner and Coloured

Identities', p. 203.

⑭ *APQ*, 4 December, 1909.

第二章 リベラル派の歴史家とカラード

本章では、リベラル派の歴史家が一九二、三〇年代、カラードの歴史をどのように語ったのかを探っていく。そのまえに二〇世紀はじめ、ヨーロッパ系をとりまく状況がいかに変化したのかを確認する必要がある。一八九九—一九〇二年の第二次南アフリカ戦争は、イギリス系とアフリカーナとのあいだに深い溝を残した。しかし、〇五年のイギリスの政権交代を契機として「和解」の機運が高まり、一〇年にはケープ植民地、旧トランスヴァール共和国、旧オレンジ自由国などが南アフリカ連邦を結成する。初期の連邦において政権を担当したのは、親英的なアフリカーナのシ・ポータ（一八六二—一九一九年、首相一九一〇—一九一九年）と J・C・スマッツ（一八七〇—一九五〇年、首相一九一九—一九二四、三九—四八年）の南アフリカ党であった。一方で同じ時期、より反英的なアフリカーナ・ナシヨナリズムも「プア・ホワイト」（アフリカーナ貧困層）を魅了しはじめる。一四年の蜂起の失敗以降、ナシヨナリストは軍事路線より遵法闘争に転換、J・B・M・ヘルツォーク（一八六六—一九四二年、首相一九二四—三九年）率いる国民党に結集した。第一次世界大戦が終結すると、同

党は不況を背景として支持を急速に拡大し、二四年には政権を獲得した。^①

政権を獲得した国民党は、カラードにも支持を拡大しようとする。一九二〇年、南アフリカ党がイギリス系のユニオニスト党を吸収して以降、APOは同党を支持するようになっていた。南アフリカ党とAPOとの関係に対抗して、ケープの国民党指導者で内相のD・F・マラン（一八七四—一九五九年、首相一九四八—五四年）は二五年、カラードを対象としたアフリカ国民同盟を組織する。しかし、同盟は結局、カラードの支持を獲得できなかった。同盟は話しことばのケーブ・オランダ語、ないし書きことばのアフリカーンス語を核とするカラードとアフリカーナとの連帯を主張した。ところが、機関紙の『同盟』は英語を、汎用性が高いとの理由により使用言語とする。^② また、アフリカーナの側にはカラード、とくにムスリムのマレー系との連帯にたいする抵抗感が強かった。^③ 国民党はカラードに雇用の創出も公約するが、現実には白人に熟練労働を限定したジョブ・カラー・バー（「文明化労働」政策）を優先する。その結果、二九年の総選挙ではケーブのカラード有権者の一〇%未満しか同党に投票しなかった。そこで、政権は白人について、三〇年に女性参政権を認め、三一年に財産、教育制限を撤廃、有権者に占めるカラードの割合を低くした。国民党の「背信」をめぐって同盟は分裂し、三一年、活動を停止する。^④

同盟にも、またAPOにも失望したカラード・エリート層の多くは一九三〇年代、カラード・ヨーロッパ人協議会に結集する。協議会運動の起源は、二〇年代はじめに遡ることができる。当時、南アフリカ党に飽き足りないトランスヴァールのイギリス系知識人は、アフリカ人の労働運動と連携して国民党に対抗しようとしていた。こうしたリベラル派の知識人は二一年、ヨハネスブルクでヨーロッパ人・アフリカ人協議会を組織、二〇年代なかばにはジョブ・カラー・バーにたいする抗議行動などを展開する。しかし、知識人の多数派が二九年、アメリカ合衆国のカーネギー財団の助成により南アフリカ人種関係研究所を設立すると、研究所が協議会を指導するようになった。同時に、協議会の活動の中心も抗議行動ではなく、貧困、教育などにかんする調査・研究、政策提言に変わる。また、戦闘的なアフリカ人の労働運動とは訣別、

穩健なエリート層を相手とすることとなった。^⑤

協議会運動は一九三〇年代はじめ、南アフリカの各地に拡大する。三一年にはケープタウンでも、イギリス系の大学教授、国教会の聖職者などがカラードのエリート層とともに、カラード・ヨーロッパ人協議会を組織した。協議会の初代議長は市議会議員のM・J・アダムズであるが、三六年にはケープタウン大学の教員で社会学者のE・バーストンに交代した。一方、幹事はカラードで教員のA・J・B・デズモアが務めている。協議会は「合法的な手段」、とくに「カラードの人々に影響する地域的、ないし全国的な諸問題の科学的調査」によって、「非熟練労働者の賃金の上昇」、「住宅事情の改善」、「教育の改善」を図ることを目的とした。三二年には、イギリス系が所有しカラードが編集する週刊の『サン』紙が、協議会の事実上の機関紙として刊行をはじめた。また同年には、成員が一、五〇〇人に達している。調査・研究と政策提言に力点をおく運動の性格に比して、少ないとはいえない。ここで、当時のヨーロッパ系政党をめぐる状況に目を転じると、三三年、南アフリカ党は国民党と、不況を理由として挙国一致内閣をつくり、三四年には合同し連合党を結成している。南アフリカ党の消滅により、協議会はカラード・エリート層にとって、政策に影響を与える唯一の現実的な選択肢となった。政府は三四年、協議会の提案にもとづき、カラードの貧困、教育などについて調査するウイルコックス委員会を設置している。退潮著しいAPOも、協議会との連携に傾いていた。^⑥

しかし、協議会運動が重要なのは、運動にかかわった二人のリベラル派の歴史家——マクミランとJ・S・マレー（一八九八—一九六九年）——が最初期のカラードの歴史を著したためでもある。第一のマクミランは一八八五年、スコットランドのアバディーンで誕生、九一年、ミッシヨナリの父とともにケープタウン近郊のステレンボッシュに移住した。一九〇六年にはオックスフォード大学の近代史専攻を卒業するが、関心は歴史より救貧と社会改革にあり、一年にはフェビアン協会に入会した。同年には東ケープ・グラハムズタウンのローズ・ユニヴァーシティ・カレッジに就職するが、研究の主題は「プア・ホワイト」問題であった。ところが一七年、ヨハネスブルクの南アフリカ鉱山・技術専門学校（二二年

ウィットウォータースラント大学に改組)に異動すると、関心はアフリカ人に移る。二二年にはヨーロッパ人・アフリカ人協会の一員となり、ジョブ・カラー・バーにたいする抗議行動などにも参加した。^⑦このころマクミランは、同じスコットランドのアバディーン出身で、一九世紀前半のケープ植民地においてロンドン・ミッシヨナリ協会の最高責任者であったJ・フィリップ(一七七七一―一八五一年)の文書を、子孫の付託により入手する。『ケープの人種問題』(一九二七年)はフィリップ文書にもとづいた、マクミランにとって初の本格的な歴史研究である。一九一〇世紀転換期の南アフリカ史研究では入植者が主役であり、フィリップはその利益をふみにじる敵役でしかなかった。^⑧しかしマクミランは、同じ「スコットランド人の帝国」、「ミッシヨナリの帝国」に属するこの人物が、いかに先住民の法的不平等の改善、奴隷制の廃止などに尽力したかを主題としている(『人種問題』の構成については表二参照)。

『人種問題』は、フィリップの尽力の対象となったカラードの歴史でもあった。マクミランが強調したのはこの人々の「進歩」である。当時の南アフリカでは、カラードは混血ゆえに不完全で劣っている、としたユダヤ系のS・G・ミリン(一八八八―一九六八年)の小説『神の継子たち』(一九二四年)が多数の読者を獲得していた。^⑨しかし、マクミランはつぎのように反論する。

……〔かつて〕「浮浪」かつ軽蔑の対象となっていたいわゆるホットテントトは一八三〇年代にはすでに、今日のカラードの人々と外見上たいては違わない混血の人種となった。その進歩は、ゆえに非常に重要であり……その歴史はつまり、身体的に劣った血統で、もともとバントウーほど能力もなく、農業の兆しもない遊牧の原住民の子孫がいかにして、ヨーロッパ人の諸特権を完全に共有するの十分に考えられる文明の標準を達成するようになったか、という物語である。……^⑩

一方でマクミランは、カラードはヨーロッパ人との混血ゆえに優れている、とするA・P・O以来の主張も否定した。『人種問題』は以下のようにカラードの文明性、ないしヨーロッパ性を重視する。

……多くのカラードの人々が〔純血のバントウーより〕疑いなく一般に優れているのはおそらく、ヨーロッパ人の血が混合している

表2 W・M・マクミラン『ケープの人種問題』（1927年）の構成

第1部 問題の背景	
第1章	序
第2章	歴史地理とボーア人の起源
第3章	有色人種／未開の慣習と文明化された法／1795年の hottentott の地位
第4章	トリー反動の時代の植民地政府
第5章	人道主義とミッショナリの運動—「エクセター・ホール」—
第2部 「hottentott」から「ユーラフリカン」へ	
第6章	喜望峰における奴隷制
第7章	1806年の南アフリカ／ミッショナリと有色人種の権利のための最初の闘い
第8章	ジョン・フィリップ
第9章	1820年の入植者
第10章	hottentott 問題の進展／フィリップの初期の態度
第11章	hottentott 問題の重要性／「諸制度」の起源と機能
第12章	1822年の hottentott の地位／法的無能力と労働問題
第13章	人種問題にかんする新たな見解／嵐の起り
第14章	チャールズ・サマセット卿との政治的闘い
第15章	人種問題の再来／hottentott の解放／法令第50号
第16章	反動／1834年の浮浪法案／グレート・トレック
第17章	ケープの政治的自由の誕生
第18章	「hottentott」から「ユーラフリカン」へ

からではない。むしろ、オランダ語を習慣的に用いてきたこと、そしてしばしば英語にも習熟してきたことよって与えられた測りしれない利点、つまりヨーロッパ文明との長い接触のためである。……

同書は、混血性がまとわりつく「カラード」ではなく、ヨーロッパ性を強調する「ユーラフリカン」の語の使用を提起している^⑩。

このように、マクミランはスコットランド人ミッショナリばかりでなくカラードにも関心を示したが、より大きな関心は「今日の状況」、つまり「バントウ問題」にあった。

『人種問題』は一九世紀前半のカラードと同様に一九二〇年代の「バントウ」にたいしても、徹底的な自由を政策の基準とするよう説いている^⑪。同書につづく『バントウ、ボーア、ブリトン』（一九二九年）はフィリップとアフリカ人との関係、『錯綜の南アフリカ』（三〇年）は一九二〇年代のアフリカ人の

表3 J・S・マレー『ケープ・カラードの人々』
(1939年)の構成

第1章	起源
第2章	グリカ
第3章	バスタードと北西部の植民地化
第4章	植民地のホッテントット (1795-1828年)
第5章	解放
第6章	結果
第7章	カット川入植
第8章	解放以降のミッシュナリ諸団
第9章	後の時代
第10章	結論

窮乏化を主題とした(『人種問題』と合わせて「三部作」)¹³⁾。マクミランは三〇年、ヨーロッパ人・アフリカ人協議会の議長となるが、運動の軟化を批判するなど先鋭的であったため、三三年には政府の圧力により大学を辞している。しかし、マクミランは同年以降、活動の拠点をイギリスに移し、『ケンプリッジ・イギリス帝国史』のカラードの章を執筆するなど、レイバーを代表する帝国問題の論客となっていた。¹⁴⁾

マクミランの『人種問題』を引き継いで、ヨーロッパ系による最初の本格的なカラードの歴史を著したのはマレーである。マレーは一八九八年、ケープタウン近郊のパールで誕生、一九二〇年代前半、オックスフォード大学で歴史を学ぶが、博士論文は『ニュージーランドの植民地化』であった。¹⁵⁾ 大学を出ると、マクミランがサバティカルで『人種問題』を執筆中のウィットウオーターズラント大学臨時講師を経て、二七年、ケープタウン大学に就職した。マレーはここで、上司のウォーカーの奨めによりカラードの歴史を研究するようになる。同時に、カラード・ヨーロッパ人協議会の一員ともなり、三〇年代末にはウイルコックス委員会の勧告の実行を政府に求める運動をリードした。こうした研究、運動の集大成が『ケープ・カラードの人々』(一九三九年)である(構成については表三参照)。同書は起源としてのオランダ領時代にはじまり(第一章)、内陸部に逃散した「グリカ」と「バスタード」の一九世紀以降の状況を挟んで(第二、三章)、奴隷制廃止前後のイギリス領ケープ植民地に移る(第四―六章)。次いで、ミッシュン・ステーションの内外的ようすを経て(第七、八章)、二〇世紀の貧困、教育、選挙権について論じる(第九章)。マレーは、マクミランの『人種問題』を挑戦的と称賛した。しかし、スコットランド人ミッシュナリとアフリカ人にたいする関心が勝っていたマクミ

ランとの違いは明白である。『ケープ・カラードの人々』はグリカ、バスタード、当局による実験的な「ホットtentott」のカット川入植などにかんする初の研究であった。^⑭

マレーは一方で、カラードにかんするマクミランの主張の多くを踏襲している。『ケープ・カラードの人々』はまず、「(バントゥーと違って)カラードが今日、われわれと異なるようには見えない」とし、その理由を、「カラードの多くが南アフリカの多くのヨーロッパ人より『文明化された』様式で生活している」ことに求める。ここでいう「ヨーロッパ人」とは、アフリカーナ・ナシヨナリストを支持し、ジヨブ・カラール・バーによる救済の対象となったプア・ホワイトのことである。同書はまた、「南アフリカ人の人種偏見は、カラードの『血』の本質的劣等性を揺るぎなく信じていることによる」とも記した。このようにカラードの文明性を重視し、混血にたいする偏見を批判する点において、マレーとマクミランとの違いは少ない。しかしマレーは、マクミランが提起したユーラフリカンの語は使わず、かえってタイトルにまでカラードの語を用いている。更に、「ヨーロッパ人(のコミュニティ)」と別個なカラードのコミュニティが、用語をどのように現実的に解釈しても存在しない」ことも強調する。一九三六年、ケープのアフリカ人が三人の「白人原住民代表」にしか投票できなくなると、こうした選挙権分離がカラードにも拡大するのではないかと、との懸念が高まった。マクミランが『人種問題』を執筆した二〇年代より、事態は深刻になっていた。^⑮

ただし、『ケープ・カラードの人々』はマレーにとつて、唯一のカラードにかんする著書となった。一九四〇年代前半には一八世紀末の入植者とアフリカ人との遭遇を研究するものの、四五年、ウィットウォーターズラント大学に異動すると、フィールドも一九世紀末のトランスヴァール共和国に移した。^⑯ 以上のようにマクミランもマレーも、カラードにたいする関心が一過性であったことは否定できない。反英的なアフリカーナ・ナシヨナリズムとの対抗の一部に過ぎなかったということもできる。しかし、協議会運動の実践と一体で、かつ混血性ではなく文明性にカラードの優越の根拠を求めた二人の著書は、同世代、次世代のイギリス系とカラードの歴史叙述にも影響を与えていくこととなる。

- ① 二〇世紀はじめのヨーロッパ系をとりまく状況の変化については、拙稿「南アフリカ連邦結成と『和解』の創出」『史林』八五巻三号(二〇〇二年)。同「ミルナー・キンダーガルテンの南アフリカ経歴(一八九九—一九〇二年)と『シティスマンシップ』」『史林』八六巻六号(二〇〇三年)。
- ② ブラウンは一九一九年にも、カラードを対象とした統一アフリカーナ連盟を組織している。その名称は、カラードもまたアフリカーナ(アフリカーナ語)であるとの主張による。しかし、連盟と密接な関係にあった『ナリオン』紙も英語を基本的な使用言語とした。連盟はカラードの支持を獲得できなかった。二一年、活動を停止した。Ghimee, 'Non-Racial Franchise and Afrikaner and Coloured Identities', pp. 207-212. 以下、参照。Lewis, *Between the Wire and the Wall*, pp. 122-126.
- ③ ブラウンは同盟を組織したのと同じ一九二五年、ケープ・プレー協会を組織。プレー系をカラードと分断した。Ibid., p. 131.
- ④ 同盟の二つは、Ghimee, 'Non-Racial Franchise and Afrikaner and Coloured Identities', pp. 212-220. 以下、参照。Lewis, *Between the Wire and the Wall*, pp. 128-131.
- ⑤ ヨーロッパ人・アフリカ人協議会と南アフリカ人種関係研究所に「すべは」Rich, *White Power and the Liberal Conscience*, pp. 10-32.
- ⑥ カラード・ヨーロッパ人協議会やマイルロックス委員会に「すべは」Lewis, *Between the Wire and the Wall*, pp. 154-165.
- ⑦ 拙稿「ペンワトン」五—一頁。
- ⑧ たむらひ G. M. Theal, *South Africa* (London, 1894); G. E. Cory, *The Rise of South Africa*, 5 vols. (London, 1910-1930). ペンワトンについての先行研究批判は、W. M. MacMillan, *The Cape Colour Question: A Historical Survey* (London, 1927), pp. 6, 9.
- ⑨ S. G. Millin, *God's Stepchildren* (Cape Town, 1924). 以下、参照。Id., *The South Africans* (London, 1926); V. February, *Mind Your Colour: The 'Coloured' Stereotype in South African Literature* (London, 1981).
- ⑩ MacMillan, *Cape Colour Question*, p. x.
- ⑪ Ibid., pp. 266-267.
- ⑫ Ibid., p. x.
- ⑬ Id., *Bantu, Boer, and Briton: The Making of the South African Native Problem* (London, 1929); id., *Complex South Africa: An Economic Foot-Note to History* (London, 1930).
- ⑭ Id., 'The Problem of the Coloured People, 1792-1842', in A. P. Newton and E. A. Benians (eds), *The Cambridge History of the British Empire vol. 8: South Africa, Rhodesia and the Protectorates* (Cambridge, 1936). 以上の論議は「すべは」拙稿「ペンワトン」一五—二〇頁。なお、レーナーのペンワトンをリミナルとすることは、キリス史では不適切であるが、本稿では南アフリカ史の慣例に従う。
- ⑮ J. S. Marais, *The Colonisation of New Zealand* (Oxford, 1927).
- ⑯ C. Saunders, *The Making of the South African Past: Major Historians on Race and Class* (Cape Town, 1988), pp. 115-116; Lewis, *Between the Wire and the Wall*, p. 169. ウォーカーが一九三六年、ケンブリッジ大学に異動するまで、マレーは「ミルナー・キンダーガルテン」が刊行していた『サウンド・テーブル』誌の南アフリカ問題担当を引継ぎ、三八年にはカラードに「すべは」寄稿している。(J. S. Marais) *South Africa I: The Cape Coloured People, Round Table* 28-111 (1938). 拙稿「ウォーカー」九四頁。
- ⑰ J. S. Marais, *The Cape Coloured People 1652-1937* (London, 1939), p. viii.

⑧ *Ibid.*, pp. 281-283.

⑨ *Id. Maguier and the First Boer Republic* (Cape Town, 1944): *id.*

The Fall of Kruger's Republic (Oxford, 1961). 以上の経歴については
Saunders, *Making*, p. 117.

第三章 カラードと歴史

本章では、カラードのエリート層がとくに一九三〇年代、自己の歴史をいかに語ったのかを検討していく。第一章に記したとおり、A P Oはカラードを、白人に近いと主張することによってアフリカ人と区別しようとした。このことはレイシズムに対抗する戦略であったが、一方で、カラードと白人との区別はいまになる。二〇世紀はじめ、政治運動の外で進化したのは、ケープタウン周辺の非ヨーロッパ系とヨーロッパ系との区別を従来保証してきた奴隷時代の記憶の忘却と、カラードの白人化であった。こうした事態にたいして、一九三〇年代にはカラード・エリート層によるアイデンティティの明確化が顕著になる。たとえば、カラード・ヨーロッパ人協議会の事実上の機関紙であった『サン』紙は、「人種の誇り」の重要性を強調し、そうした誇りの欠如はカラードの統一と前進を妨げる、と論じた^①。協議会じたい、ヨーロッパ人の役割が大きかったものの、名称にカラードの語が入った最初の政治組織である。しかし、人種の誇りの創出にとつてもっとも肝要な手段は「歴史」であった。

焦点の一つは、一九三四年の奴隷制廃止一〇〇周年にある。ここでは、協議会との連携に傾いていたA P Oの幹部で、アメリカ合衆国に拠点をおくA M E（アフリカ・メソヂスト監督制）教会の牧師のH・F・ガウ（一八八七—一九六八年）が指導的な役割を担った。ガウはケープタウンで、西インド諸島出身の牧師である父と、アフリカ系アメリカ人の母とのあいだに誕生した。一九〇五年、渡米し、A M E教会のウィルバーフォース・カレッジなどで神学を修め牧師、音楽教師となり、第一次世界大戦では合衆国軍に従軍してフランスに赴いている。二五年には帰国、トランスヴァールのウィルバーフォース・インステイテュート校長を経て、ケープタウンの教会に勤めることとなった^②。ガウは三四年、奴隷制廃止記念

日の一二月一日に礼拝で、もと奴隷の娘による父の体験の語り聞かせを復活、信徒とともにカラード地区のデイストリクト・シックスを進行した。^③しかし、一〇〇周年のクライマックスは翌年一月一〇、一日の、カラードの歴史を主題とするページェント（野外劇）にあった。このページェントは、『ケープ・アーガス』紙の後援によりガウが監督、五〇〇人以上のカラードが出演したものである。^④プログラムには、当時副首相のスマッツがメッセージを寄せ、首相のヘルツォーク、APO議長のアブドゥラーマンも名を連ねている。^⑤

このように、ページェントでは白人の役割も無視できなかつたが、ガウのことはアイデンティティの明確化、白人との類縁性の強調が併存している。たとえば、ガウは『アーガス』紙の取材に、ページェントは「個別の歴史上の」できごとが非ヨーロッパ人の精神にたいして、また今日、目覚めつつある民族の意識においてなを意味するかを示す^⑥と答えた。プログラムでも、「わたしたち南アフリカのカラード民族は、ついに人種意識——誇りと尊厳、人種の統合が拡大することの……感動的な喜び——に到達しつつある」と記している。ここでいう「人種の統合」とは、南アフリカの「バントウ」ではなくアフリカ系アメリカ人との連帯の意であり、ガウじしんのルーツ、アメリカ経験などが色濃く反映している。ところが、この一節は「わたしたちは、白人の同胞に負うものにも深く感謝している」とつづく。ジョブ・カラー・バーに加えて、有権者に占めるカラードの割合が低下した時代、白人との共通性の主張もますます重要になっていた。^⑦

ページェントの内容もこうした二面性を抱えている（構成については表四参照）。アフリカ系アメリカ人の詩（「エチオピア頌歌」、靈歌の利用は、ガウも認めているように「人種の統合」を意識したものである。またカラードの多様性にも配慮し、先住民（第一幕）、グリカの首長アダム・コック（第四幕）の場面をおき、新曲「マレー・クォーター」（ケープタウンのマレー系地区のこと）を演奏している。^⑧しかし、ページェントはアフリカーナ・ナシヨナリストと国民党政権にたいする配慮も欠かしていない。オランダ東インド会社のヤン・ファン・リーベック（第二幕）、トランスヴァール共和国・オレン

表4 奴隷制度廃止100周年バージョン（1935年）の構成

バージョン・ブラスバンド／「エチオピア頌歌」／「オセロ」序曲（バージョン・オーケストラ）	
第1幕	ホットtentott／ブッシュマン
第2幕	ヤン・ファン・リーベック, 1652年
霊歌	
第3幕	奴隷
霊歌	
第4幕	人種混交／アダム・コック
第5幕	バントゥー
聖歌	
第6幕	不屈で楽しい草原（フェルト）の民
ギリカの歌	
第7幕	イギリス人にたいするオランダ人の、ブラーウベルクの歴史的戦い（1806年）
エチオピア（合唱）	
第8幕	イギリス人／工業化／ミッシヨナリ
「失われたコード」（独唱・合唱）／霊歌／「マレー・クォーター」（バージョン・オーケストラ）	
第9幕	1834年／ウィルバーフォース（ピット）
マルティン・ルターの聖歌	
第10幕	グレート・トレック／フォルトレッカーの福音
「アフリカに配慮を与えよ」／「鉱山の音楽」（独唱・合唱）	
第11幕	リヴィングストンの事業／鉱業
第12幕	カーマ, 1895年, ヴィクトリア女王
「これが秘密」（歌）／「ルール・ブリタニア」	
第13幕	運動競技〔プログラムのみ／上演なし〕
第14幕	世界大戦〔プログラムのみ／上演なし〕
フィナーレ	

「失われたコード」（1877年）はイギリスの喜歌劇（サヴォイ・オペラ）作曲家 A・サリヴァン（1842-1900年）の作品。他については本文参照。

ジ自由国の建国（第一〇幕）の場面を配したことはその例である。⑨ 奴隸（第三幕）についても、主題はオランダ系入植者による酷使ではなく、医学未発達時代に天然痘がいかに入植者と奴隸を苦しめたかであった。⑩ 更に一八〇六年のブラーウベルクの戦いで、「カラード民兵」と「ホットtentトット歩兵隊」がイギリスの侵略にたいして、オランダ系入植者とともに「母国を防衛」したことも強調している（第七幕）。⑪ たしかに第一次世界大戦において、カラードのケープ歩兵軍団がイギリス帝国の勝利に貢献したことも扱っているが（第一四幕）、プログラムのみで上演はなかった。⑫

もつとも、ページェントが全体として重視したのはミッシヨナリの活躍である。人種混交（第四幕）にかんしても、内容はオランダ人船医と、「キリスト教に改宗した」ホットtentトットの少女との「結婚」であった。⑬ しかし、プログラムの主要な関心は一九世紀のイギリス帝国にあった。とくに、ケープのフィリップが奴隸制廃止という、イギリスの政治家ウィルバーフォースとピットの理想をいかに実現したかが重要となっている（第九幕）。このことは、ガウがウィルバーフォースの名を冠する学校を遍歴した事実とともに、マクミランの『人種問題』の影響を思わせる。ただし、両者の関係について直接的な証拠はない。⑭ 話題は次いで、フィリップと同じくスコットランド人ミッシヨナリのリヴィングストンに移る（第一二幕）。⑮ またページェントの終わりは、ベチユアナランド（現ボツワナ）の王カーマが一八九五年、ヴィクトリア女王より聖書（「イングランドの偉大さの秘密」）を拝領する場面（第一二幕）と愛国歌「ルー・ブリタニア」であった（第一三幕以降は上演がなかった）。⑯

白人中心主義的なカラードの歴史は、教育の領域では一層顕著となる。一九三六年、カラード教員養成大学をはじめ、白人校と異なる歴史教科書を用いた。この教科書は、APOの関連団体であったカラード教員連盟の幹部で、大学教員のD・W・ヘンドリクスとC・J・ヴィリユンが執筆している。⑰ しかし、その内容は公定のカリキュラムとほとんど変わることがなかった（構成については表五参照）。まず、南アフリカ史とカラードにかんする記述じたいが少なかった。南アフリカ史は全三部中一部（二六四頁中一一五頁）、内カラードは一六、一七、二〇、二四章に登場する（計一三頁）のみである。⑱

表5 D・W・ヘンドリクス／C・J・ヴィリユン『教員志望学生の歴史課程——カラード教員養成大学用——』（1936年）の構成

序	
第1部 全体史〔1-8章／略〕	
第2部 イギリス帝国の成長〔9-14章／略〕	
第3部 南アフリカ史と市民の道徳	
第15章	序
第16章	ケープ、1652-1679年
第17章	ケープ、1679-1795年
第18章	会社支配の最後の日々
第19章	ケープ、1795-1806年
第20章	ケープ、1806-1836年
第21章	グレート・トレックと諸共和国
第22章	ケープ、1836-1872年
第23章	イギリス領南アフリカの拡大、1872-1902年
第24章	南アフリカ連邦結成にいたるできごと
第25章	連邦とその諸問題
第26章	市民の道徳

また、先住民についても偏見は強く、野蛮で盜癖があり怠惰と記した。^{②①} 一方で、奴隸、混血の人々がオランダ系入植者の規律、職業訓練、宗教によって「ヨーロッパ社会の積極的かつ建設的な諸力に従っていった」とするところは前年のペー
ジェントに近い。^{②①} 更に、スコットランド人ミッシヨナリの役割を重視する点はページェント、マクミランの『人種問題』
と共通している。

一九三八年には、カラードじしんによる最初の本格的な歴史となる『褐色の南アフリカ』も世に出た。同書は、ケープ
タウンのカラード地区であった「ディストリクト・シックスの教授」C・ジーアヴォーゲル（一九〇三―五七年）が著して
いる。ジーアヴォーゲルは多種多様な仕事をしつつ独学し、一九三四―三九年にはハイマン・リーバマン会館の初代司書

を務めた。^{②②} この会館は三四年、ケープタウン市がもと
市長リーバマンの遺贈とカーネギー財団の助成により
ディストリクト・シックスに設立したもので、図書室、
保育所、クラブ・教育活動の拠点を兼ねていた。^{②③} 会館
の初代名誉館長はカラード・ヨーロッパ人協議会第二
代議長のバストーンで、ジーアヴォーゲルも同協議会の
一員であった。^{②④}

『褐色の南アフリカ』は、パンフレット『カラードの
人々と人種問題』（一九三六年）に次ぐジーアヴォーゲ
ルの第二作で、協議会の『サン』紙に寄稿した記事、
AME教会での講演などをまとめている（構成につい
ては表六参照）。『褐色の南アフリカ』はまず先住民に

表6 C・ジーアヴォーゲル『褐色の南アフリカ』
(1938年)の構成

第1章	白人以前のケープ
第2章	奴隷の到来
第3章	褐色の人々の発展
第4章	褐色の南アフリカの経済小史
第5章	褐色の南アフリカの政治小史
第6章	褐色の南アフリカの教育小史
第7章	南アフリカにおける国民の福祉
第8章	キリスト教, 科学, 人種

たいする偏見を、当時ケープタウン大学にいたI・S・シャペラ(一九〇五―二〇〇三年)の人類学研究にもとづいて是正した(第一章)。「道徳的に優れ……もつとも文明化された人々より種族の法を守っていた」ことを強調し、より差別的でない「コイコイン」(コイコイ)の語を用いている。また、協議会運動の一員として貧困、教育について論じ、ジョブ・カラー・バーを批判した(第四、六―七章)。

しかし同書においても、主題は白人との共通性にある。とくに、「黒人」にも当てはまる「カラード」(有色人種)の語は誤りで、「褐色のハイブリッド」がより適切である、と主張した²⁸⁾。「褐色」の呼称はケープ・オランダ語／アフリカンス語に由来し、オランダ系との混血を強く示唆する。ただし、同書はそのことには言及せず、「南アフリカのハイブリッド、カラードの人々は多くの場合部分的にイギリス人に由来しており、必然的にその人種の美德のいくらかを受け継いでいるはずである」と記す²⁹⁾。同書はこのように、マクミランと異なり混血性の積極的側面を肯定するが、マクミランに依拠するところも多い。フィリップの役割を重視する一方で(第二、五章³⁰⁾)。カラードの混血性を蔑視した小説家のミリンに、マクミランと同じく反論している(第三、八章³¹⁾)。混血性より「重大だったのは進歩的な西洋文明との接触によつてもたらされた変化」であった、とするのもマクミランと同様である。カラードは、「白人のまさにただなかで生活し、原住民とは根本的に異なり、白人の文明以外知らず、白人の言語を話す」とも記している³²⁾。

以上のカラードの歴史について、影響力を推しはかることは難しい。一九三五年のページェントには、後援した『ケープ・アーガス』紙によると二、〇〇〇人の「ヨーロッパ人」が参加したが、カラードの観客数は不明である³³⁾。教員養成大学の歴史教科書の利用状況、『褐色の南アフリカ』の発行部数なども判然としない。歴史の語り手がその後、カラード・

エリート層のなかでどのような位置を占めていったのかも多様である。ページェントを演出したガウは四二―四四年、A P O議長を務め、歴史教科書の執筆者の一人ヴィリユンも四一年、教員連盟議長となった^⑮。一方で、教科書のもう一人の著者ヘンドリクスにかんして、カラーード・ヨーロッパ人協議会幹事のデズモアの妻は、「同僚にはカラーードとして知られているが、「白人に同化することを望み」カラーードの人々とは何の関係もない」と評している^⑯。

確かなのは一九四〇年代以降、従来のカラーードの枠組みが政治の領域において急速に色褪せていったことである。四八年にはじまったアパルトヘイト体制は、カラーードのカテゴリを分割する。五〇年の人口登録法と翌年の人口調査は、「ブッシュマン」、「ホットテントット」などをカラーードより「原住民」に移した^⑰。また、マレー系、グリカをカラーード内の小集団として区別し、とくに前者については「マレーイズム」（マレー・アイデンティティ）の創出を図っている^⑱。一方で二〇世紀なかばになると、よりラディカルな政治運動がカラーードのあいだに広がっていく。トロツキスト系の非ヨーロッパ人統一運動（一九四三年結成）、ANC系の南アフリカ・カラーード人民機構（五三年結成）などである。こうした運動は内部の相違、対立も大きかったが、アフリカ人などの連帯を志向しカラーード・アイデンティティに否定的な点では共通していた^⑲。最初期の例としては一九三五年のページェントにおいて、詳細不明の「レーニン・クラブ」がページェント反対のピラを出演者と観客に配っている^⑳。

しかし、一九二、三〇年代のカラーードの歴史は四〇年代以降も長く影響を与えていく。たとえば四九年には、当時ケープタウン大学にいた歴史家のL・M・トンプソン（一九一六―二〇〇四年）がパンフレット『ケープのカラーード選挙権』を執筆、問題の経緯をたどって選挙権分離の動きを批判した。このパンフレットは、カラーード・ヨーロッパ人協議会を指導した南アフリカ人種関係研究所が出版し、『ケープ・カラーードの人々』のマレーも序文を寄せている^㉑。歴史叙述の外に目を転じると、一九六六年にはじまった強制移住によって、ケープタウンのカラーードは「記憶の場」ディストリクト・シックスを喪失した^㉒。また、八三年結成の統一民主戦線はピコの黒人意識思想にもとづき、カラーード・アイデンティティの拒

絶を訴えている^⑧。ところが、八六年にはカラードの教育者R・E・ファン・デア・ロスが、マクミラン、ジーアヴオーゲルを参照しマレーを引き継いで二〇世紀のカラードの歴史を著した(『アパルトヘイトの繁栄と衰退』^⑨)。カラードの歴史の影響力は、一九八〇年代になっても残るのである。

- ① Sun, 23 September, 1932; 25 November, 1932.
- ② R. R. Edgar (ed.), *An African American in South Africa: The Travel Notes of Ralph J. Bunche 28 September 1937-1 January 1938* (Athens, Ohio, 1992), p. 326.
- ③ *Cape Times*, 1 December, 1934. 白人への参照。Ward and Worden, 'Commemorating, Suppressing and Invoking Cape Slavery', p. 205.
- ④ *Souvenir, 1834-1934: Historical Pageant Held at Green Point Track, on Thursday and Friday, 10th and 11th Jan., 1935 at 8 p.m.* (Cape Town, 1935), pp. 34, 36-37; *Cape Argus*, 11 January, 1935.
- ⑤ *Souvenir, 1834-1934*, pp. 2-3, 35.
- ⑥ *Cape Argus*, 10 January, 1935.
- ⑦ *Souvenir, 1834-1934*, p. 31.
- ⑧ *Ibid.*, pp. 9, 12, 14, 20, 22, 31.
- ⑨ *Ibid.*, pp. 10, 15, 22. 白人への参照。 *Ibid.*, pp. 5, 7, 18.
- ⑩ *Ibid.*, pp. 11, 25. 白人への参照。 *Ibid.*, p. 6.
- ⑪ *Ibid.*, p. 13.
- ⑫ *Ibid.*, p. 19.
- ⑬ *Ibid.*, p. 30; *Cape Argus* 11 January, 1935.
- ⑭ *Souvenir*, p. 15.
- ⑮ *Ibid.*, p. 23. 白人への参照。 *Ibid.*, pp. 19, 21.
- ⑯ *Ibid.*, p. 27. 白人への参照。 *Ibid.*, p. 26.
- ⑰ *Ibid.*, p. 28; *Cape Argus* 11 January, 1935. マンデルレー女王の空の黒人王に聖書を贈る絵画については、井野瀬久美恵「黒人王、白人王に謁見す——ある絵画のなかの大英帝国——」(山川出版社、二〇〇二年)。
- ⑱ Adhikari, *Not White Enough, Not Black Enough*, p. 39.
- ⑲ D. W. Hendricks and C. J. Viljoen, *Student Teachers' History Course: For Use in Coloured Training Colleges* (Paarl, 1936), pp. 157-161, 169-170, 192-199, 240-241.
- ⑳ *Ibid.*, pp. 158, 160.
- ㉑ *Ibid.*, pp. 159-160.
- ㉒ *Ibid.*, pp. 192-199.
- ㉓ Edgar, *An African American*, pp. 332-333; P. Clark, "Better Libraries for Everyone!": The Development of Library Services in the Western Cape in the 1940s, *Innovation* 28 (2004), p. 25; Adhikari, *Not White Enough, Not Black Enough*, p. 41.
- ㉔ Edgar, *An African American*, p. 333; Clark, "Better Libraries for Everyone!", pp. 24-25.
- ㉕ Lewis, *Between the Wre and the Wall*, p. 156; Clark, "Better Libraries for Everyone!", p. 25.
- ㉖ C. Ziervogel, *Brown South Africa* (Cape Town, 1938), p. 4. 白人への参照。Id., *The Coloured People and the Race Problem* (Ceres, South Africa, 1936), p. 3. マンデルレー女王の参照。トビヤクハシの参照。I. S. Schapera, *The Khoisan Peoples of South Africa: Bushmen and*

- Hottentots* (London, 1930); id. *The Early Cape Hottentots* (Cape Town, 1933); id. (ed.) *Western Civilization and the Natives of South Africa: Studies in Culture Contact* (London, 1934).
- ② ヌベヅ' Ziervogel. *Brown South Africa*, pp. 39, 74.
- ③ *Ibid.*, pp. 19-20.
- ④ *Ibid.*, p. 21.
- ⑤ ヌベヅ' *Ibid.*, p. 15. 白人への参照。Id. *Coloured People*, p. 11.
- ⑥ ヌベヅ' Id. *Brown South Africa*, pp. 24, 91. 白人への参照。Id. *Coloured People*, p. 8.
- ⑦ Id. *Brown South Africa*, p. 22.
- ⑧ *Ibid.*, p. 39. 白人への参照。Id. *Coloured People*, p. 4.
- ⑨ *Cape Argus*, 11 January, 1935.
- ⑩ Lewis. *Between the Wire and the Wall*, pp. 203, 222. Edgar. *An African American*, p. 326. Adhikari. *Not White Enough, Not Black Enough*, p. 39.
- ⑪ 1962年11月24日付の南アフリカ共和国政府の旅行許可状。南アフリカを訪問しようとしたR・J・バンチン博士の旅行許可状。Notes of R. J. Bunche, 1 November, 1937, in Edgar. *An African American*, p. 96.
- ⑫ Besten. "We Are the Original Inhabitants of This Land", p. 137.
- ⑬ Ward and Worden. 'Commemorating, Suppressing, and Invoking Cape Slavery', pp. 207-208.
- ⑭ M. W. Hommel. *Capricorn Blues: The Struggle for Human Rights in South Africa* (Toronto, 1981); B. Nasson. 'The Unity Movement: Its Legacy in Historical Consciousness', *Radical History Review* 46-47 (1990); C. Rassool and L. Witz. 'The 1962 Jan Van Riebeeck Tercentenary Festival: Constructing and Contesting Public National History in South Africa', *Journal of African History* 34 (1993), pp. 462-466; Ward and Worden. 'Commemorating, Suppressing, and Invoking Cape Slavery', p. 207; Adhikari. *Not White Enough, Not Black Enough*, pp. 45-49.
- ⑮ *Cape Argus*, 11 January, 1935.
- ⑯ L. M. Thompson. *The Cape Coloured Franchise* (Johannesburg, 1949); Saunders. *Making*, p. 123.
- ⑰ H. Trotter. 'Trauma and Memory: The Impact of Apartheid-Era Forced Removals on Coloured Identity in Cape Town', in Adhikari. *Burdened: C. Beyers. 'Identity and Forced Displacement: Community and Colouredness in District Six', in Ibid.*
- ⑱ Ward and Worden. 'Commemorating, Suppressing, and Invoking Cape Slavery', pp. 208-209.
- ⑲ R. E. Van der Ross. *The Rise and Decline of Apartheid: A Study of Political Movements among the Coloured People of South Africa, 1880-1985* (Cape Town, 1986). 白人への参照。Adhikari. *Not White Enough, Not Black Enough*, pp. 53-57.

おわりに

本稿の課題は、カラード・アイデンティティにとっての一九二、三〇年代の意味を探ることであった。当時、カラード

のエリート層は自己の歴史を本格的に語りはじめる。この語りは一面において、奴隷時代の記憶などを核とした伝統的なアイデンティティの解体に対処するものであった。しかし、アフリカーナ・ナシヨナリスト政権による経済的、政治的圧迫が高まるなかで、白人との共通性の主張も一層重要になっていった。そこで、協議会運動という場をカラード・エリート層と共有するリベラル派の歴史家が一定の役割を担った。こうした歴史家はカラードの歴史に、白人との共通項、アフリカー人にたいする優越を文明性にみる一種のプロトタイプを提供した。リベラル派は、自負していたように「全ての人種に公正」だったのではない。「文明標準」の時代に相応しく、文明性、ヨーロッパ性、イギリス性を基準として南アフリカの諸「民族」の評価を図ったのである。一九二、三〇年代はカラード・エリート層によるアイデンティティの明確化の時代であるとともに、リベラル派によるこのような関与が強まった時代でもあった。

アパルトヘイトが終わった今日も、カラードによるアイデンティティの模索はつづいている。サン、コイコイ、グリカなどは先住性、マレー系はイスラーム性を強調するようになった。^①一方で、こうした性格を主張しない人々は一九九六年、一二月一日運動を結成、奴隷時代の記憶を再生しようとしている。^②また、白人政党に協力してANCのアフリカン・ナシヨナリズムと対抗する動きも目立つ。九四年の初の全人種選挙では、カラードの多くが国民党に投票した。^③しかし、九〇年代末より同党が解体に向かうと、往年の南アフリカ党の系譜を継ぐ民主同盟がカラードの圧倒的多数の支持を集め、西ケープ州議会の与党となっている。^④更に、ケープタウン大学のカラードの歴史家が二〇〇四年、イギリス帝国の多文化性とカラードの親英性を肯定的に評価する帝国史を著したことも重要である。^⑤以上の現状は、民族・人種研究の流行が過去のものとなってもなお、問題の起源としての一九二、三〇年代にかなする分析をますます必要としている。ただし、本稿はその概観にとどまっておき、精査は次稿の課題としたい。

① Ward and Worden, 'Commemorating, Suppressing, and Invoking Cape Slavery', pp. 209, 212-215; M. Ruiters, 'Collaboration, Assimila-

tion and Contestation: Emerging Constructions of Coloured Identity in Post-Apartheid South Africa', in Adhikari, *Burdened*, pp. 121-124;

- Besten, "We Are the Original Inhabitants of This Land", pp. 139-150.
- ② Ward and Worden, 'Commemorating, Suppressing, and Invoking Cape Slavery', pp. 215-216. 同運動の結成には一九八六年、二〇世紀のカラードの歴史を著したファン・デア・ロスもかかわっている。Ruiter's 'Collaboration, Assimilation and Contestation', p. 118.
- ③ Gilmore, 'Non-Racial Franchise and Afrikaner and Coloured Identities', pp. 220-225.
- ④ Besten, "We Are the Original Inhabitants of This Land", p. 150.
- ⑤ B. Nasson, *Britannia's Empire: Making a British World* (Stroud, 2004).

（新潟大学人文社会・教育科学系准教授）

Assimilation and Alienation:
The *Yao-Zhuang* 猺獞 of Guangxi Province during
the Ming Period and the *Cen* 岑 Family the Chieftain Official

by

YAMAZAKI Takeshi

During Ming and Qing times, there lived a group of people called *Yao-Zhuang* 猺獞, also known as the *Yao* and *Zhuang*, in the mountain districts of the Huanan area. They were sometimes taken by the government officials as barbarous aliens, who threatened the social stability of the region, but at the same time they had quite close relationships with Han society, living as peasant-workers for Han land owners. In contrast there was another group of people called *Tu-ren* 土人, the people of the land or natives, whose communities were spread through the counties and prefectures of western Guangxi Province. Speaking a language belonging to the Tai-Kadai family and ruled by local chieftains, called *tuguan* 土官 or *tusi* 土司, who were granted the right to inherit certain official titles by the central government, the *Tu-ren* were regarded as a specific ethnic group that differed from both the Han and the *Yao-Zhuang*. On the other hand, the *Lang* 狼 people, who were organized as soldiers under the *tuguan*, were very similar to the *Yao-Zhuang* and virtually identical to the *Tu-ren*. As is demonstrated in this article, the complex relationships among ambiguously delineated and overlapping ethnic groups such as the *Yao*, *Zhuang*, *Han*, *Tu* and *Lang*, were much more complicated than the simplified ethnic demarcations of today would suggest.

South African Coloured Identity in the 1920s and 1930s

by

HORIUCHI Takayuki

In South Africa, the word “Coloured” refers to indigenous people, emancipated slaves, and “mixed” inhabitants in and around Cape Town, while in

other countries it is a general term used for the black population. This article explores the South African Coloured identity in the 1920s and 1930s.

In nineteenth-century Cape Colony, the British opposed the Dutch in cooperation with non-Europeans, who, in turn, acquired electoral votes by collaborating with the British. However, the non-Europeans faced more discrimination in the late nineteenth century, when the Europeans became more culturally integrated. In response to such racism, black elites in and around Cape Town founded the African Political Organization in 1902. Even after the unification of South Africa in 1910, the APO continued to support the British parties with the aim of defending their political rights. Furthermore, they called themselves “Coloureds,” and emphasized that they were superior to the “natives” because they were racially closer to the British (in the first two decades of the twentieth century many of them hoped to “pass for white”).

In 1931, under the economic and political oppression by the Afrikaner nationalist government, the Coloured elites established the Coloured-European Council along with the anti-Afrikaner British intellectuals in Cape Town. Confronted with the problem of assimilation, these elites tried to construct their identity by narrating their own history. A historical pageant to commemorate the centenary of the emancipation was led by Reverend Francis Gow in 1935; a history textbook was written in 1936 by Dorothy Hendricks and Christian Viljoen for Coloured training colleges; and Christian Ziervogel wrote *Brown South Africa* (1938), the first self-narrative of Coloured history. In the face of government persecution, it became more important for them to assert that they had much in common with white people.

Two British liberal historians played a vital role in this regard: William Miller MacMillan, professor of the University of Witwatersrand and chairman of the European-African Council in Johannesburg, sister organization of the Coloured-European Council, and Johannes Stephanus Marais, who lectured at the University of Cape Town and participated in the Coloured-European Council. They argued that Coloured people were civilized and therefore superior to Africans. MacMillan’s *The Cape Colour Question* (1927) and Marais’s *The Cape Coloured People 1652–1937* (1939) exerted great influence on contemporary and future historical narratives.